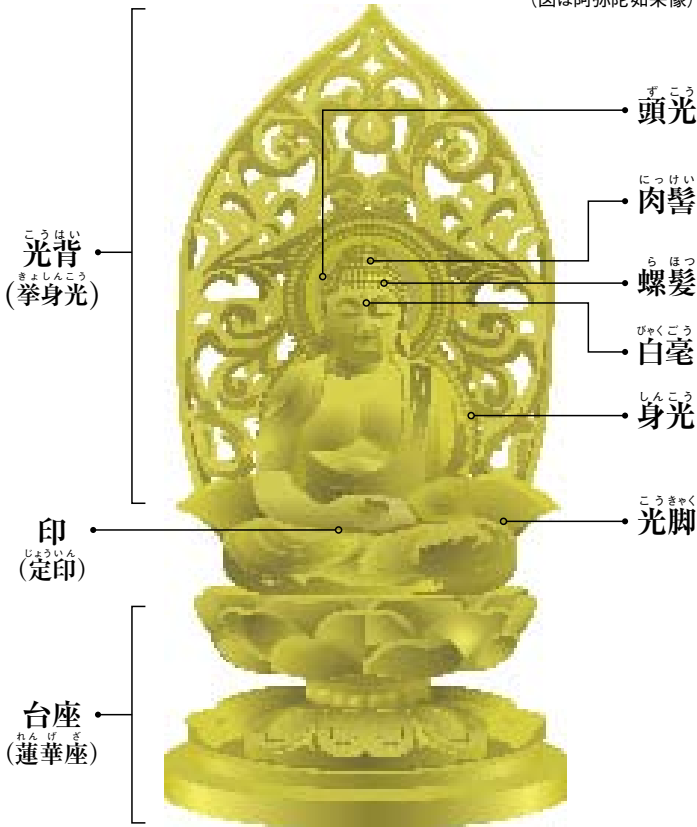


仏像各部の名称

(図は阿弥陀如来像)



印相

掌と指の組み合わせが理念を表現する

印相には様々な形がある。代表的なものに、腹の前で両手を重ね深い瞑想に入る「定印(じょういん)」、両手を胸の前に当てて手のひらを広げる「説法印(せっぽういん)」、片手で地面を指して悪魔を追い払う「降魔印(ごうまいん)」、手のひらを正面に立てて人の畏れを払う「施無畏印(せむいん)」、手のひらを上に向けて指を伸ばし、人の願いを叶える「与願印(よがんいん)」などがある。



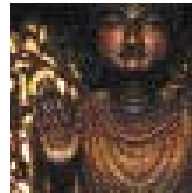
定印 深い瞑想状態を示す印。(京都・清凉寺の阿弥陀如来座像)



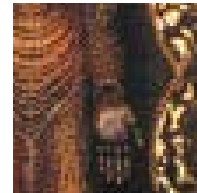
合掌印 掌を合わせた印。(京都・千本釈迦堂の木造千手観音立像)



説法印 説法を行う際の印。(京都・千本釈迦堂の木造准胝観音立像)



施無畏印 与願印と対になることも多い。(京都・清凉寺の釈迦如来像)



与願印 人の願いをかなえるための印。(京都・清凉寺の釈迦如来像)



上品下生印 来迎印の1つ。(京都・浄瑠璃寺の九体阿弥陀如来像の中尊)

仏画



曼荼羅 胎藏界曼荼羅(左)と金剛界曼荼羅(右)の2つの曼荼羅をあわせて、両界(りょうがい)曼荼羅と呼ばれる。胎藏界曼荼羅は『大日経』という經典にもとづいて描かれ、大日如来の慈悲から諸仏、菩薩が現れ、衆生救済することが説かれる。金剛界曼荼羅は『金剛頂経』にもとづいて描かれたもので、大日如来の悟りの智慧を表す。(ともに奈良国立博物館所蔵)



地獄草紙 生前に犯した罪業によって様々な地獄に落ちる、という、平安末期に流行した六道思想に基づいて描かれた地獄の様子。罪人が種々の責苦に苛まれる様子が描かれる。(東京国立博物館所蔵)

浄土变相図(浄土曼荼羅) 写真は奈良・元興寺の智光曼荼羅(非公開)。浄土三曼荼羅と呼ばれる代表的な浄土变相図のひとつで、奈良・元興寺の僧・智光が描かせたもの。

【六道絵】
ろくどうえ
地獄、餓鬼など、衆生が善悪の業によっておもむく六道の世界を描いた絵。

【地獄草紙】
じごくそうし
地獄の諸相を描いた絵。

【来迎図】
らいこうず
西方極楽浄土より阿弥陀如来が死者を迎えるために人間世界へ現れる様を描いた絵画。のちには、地藏菩薩や十一面観音、弥勒菩薩など別の仏菩薩を主役とした来迎図も制作された。

【浄土变相図】
じょうとへんそうず
仏の浄土の様と、その浄土に住まう仏を描いた絵画。浄土変、浄土曼荼羅とも。

【曼荼羅】
まんだら
仏の世界を密教の宇宙観にもとづき、大日如来を中心に体系的に描いた絵画。胎藏界たいざうかい曼荼羅と金剛界こんこうかい曼荼羅の2つがあり、両界(りょうがい)曼荼羅と呼ばれる。のちには浄土变相図(→左項)を浄土曼荼羅、神社の社頭を描いた絵を宮曼荼羅などとも呼び、広く仏神の世界を描いた絵画という意味で用いられた。

仏画の種類

みぞ、岩の形をした岩座、鳥獸をかたどった鳥獸座など。